

◆ おわりに ◆

本書は、筆者の経験も交えながら、どうしてもっとラクに研究環境に身をおいて生きていけるのか、ライフハック的な部分も含めて解説してきたつもりである。最後に、アプリやガジェットから離れて、研究者として生きていくスタンスについて少しだけ話をしてから、本書をおわりにしたい。

1 詩人の孤独、あるいは、研究者としてのスタンス

筆者の、そして、あなたの行っている研究は、独創的であればあるほど、世の中にはすぐに受け入れられないかもしれない。それでも自分の道を信じて前に進む必要がある。そこにはワクワク感とともに、ある種の寂しさがつきまとうものだ。

高村光太郎の詩『道程』は、研究者としての自負心を表しているようであり、とても力強い。まるで、怖いもの知らずのポスドクが、がむしゃらに突き進んでいるような感じだ。

『道程』 一部抜粋

どこかに通じている大道を僕は歩いているのじゃない
僕の前に道はない
僕の後ろに道は出来る
道は僕のふみしだいて来た足あとだ
だから
道の最端にいつでも僕は立っている

その一方で、道の最端に立ったとき、その先に広がるのは光ではなく漆

黒の闇かもしれない。道の最端に立つ者の孤独感を、高村は『さびしきみち』という詩で端的に表している。研究者として、一抹の寂しさとともに、いまだ知らざる土を踏む感覚をいつまでも大切にしていきたいと思う。

『さびしきみち』 一部抜粋

かぎりなくさびしけれども
われは
すぎこしみちをすてて
まことにこよなきちからのみちをすてて
いまだしらざるつちをふみ
かなしくもすすむなり

2 ハードボイルドと研究に関する考察

高村光太郎は詩人として、その厳しい眼差しで、研究者としての挾持を代弁しているように思える。しかし、研究者として生きていくことに自信がなかった20代後半の筆者には、もう少し具体的なヒーローが必要であった。そこで筆者は、ハードボイルド小説に登場する主人公に惹かれていったのである。

しっかりしていなかったら、生きていられない。
やさしくなれなかったら、生きている資格がない。

『プレイバック』（清水俊二/訳、ハヤカワ・ミステリ文庫）

このセリフに代表されるように、ハードボイルドといえば巨匠レイモンド・チャンドラーの描くフィリップ・マーロウにつきるが、マーロウはあ

まりにも神格化されすぎていた。筆者は、タフガイの探偵が今の時代に生きているというリアリティー、それがもう少し欲しかったのである。そこで、ロバート・B・パーカーが描く、探偵スペンサーの登場となる。

スペンサー・シリーズのなかでも『初秋』（菊池 光/訳、ハヤカワ・ミステリ文庫）という作品は、研究者としてのスタンスを考えるうえで、特にオススメの書である。この作品は、スペンサーがこまっしゃくれた少年、ポール・ジャコミンを引き取るころから始まり、この少年の自立を助けるという物語である。ちなみに、ポールの両親はどうしようもない馬鹿者である。閑話休題。スペンサーとポールとの会話は、ピンチをどうくぐり抜けたらよいかの示唆に富んでいる。ここでは、研究生活においてあなたがピンチに陥ったときの回避策を、スペンサーから学んでいこう。

1) 怖いボスにあなたが行っているプロジェクトを罵倒され、中止命令が出たときの対処法

「ほんとだ。まだ怖い。しかし、恐怖心はどうにもならないものなんだ。計画通りに事を進めるのがいちばんいい。脅えるのはごく当たり前のことだが、そのために考えを変えるべきじゃない」

《アドバイス》ボスの直感よりも、あなたの直感を信じましょう。どうしてもこのプロジェクトをやり遂げたいというアツい気持ちを、直球勝負でボスにぶつけてみましょう。常に「海賊になれ！」の気持ちを忘れずに。

2) 研究をしていくなかで、 (性格の悪い) 競合相手と、どう向き合うのか？

「なにか重要なことについて、例えば、お父さんがまた自分を誘拐しようとするかもしれない、といったことについて考える時は、彼が

試みるかどうかについてあれこれ考えるよりは、彼が試みた場合にどうするのがいちばんいいか、とうことを考える方がいいんだ。彼がやるかどうか、きみには判断できない、彼の考え次第だ。きみは、彼が試みた場合にやるべきことを決める。それはきみの考え次第だ。わかるか？」

《アドバイス》これはよい考え方ですね。他人がどんなカードをもっているのか、あれこれ考えるより、手持ちのカードで何ができるのかを考えたほうが現実的だと思います。この考え方は、スペンサーの行動規範にもなっています。例えば、自分の命を狙っている相手に、「今週末は用事があるから撃たないでくれ」とは言えません。なので、「自分がコントロールできる事柄がある場合は、それに基づいて必要な判断を下すのが、懸命な生き方だ」と、言い切っています。他人に決定権を預けない生き方は、自分らしく生きるためにも重要です。研究者であるわれわれにも、スペンサー流の生き方は役に立つと思いませんか？

3) たまたま選んだボスがどうしようもないとき

— 「両親」を「ボス」に置き換えて下の文を読もう

「自立心だ。自分自身を頼りにする気持ちだ。自分以外の物事に必要以上に影響されないことだ。お前はまだそれだけの年になっていない。お前のような子供に自主独立を説くのは早すぎる。しかし、お前にはそれ以外に救いはないのだ。両親は頼りにならない。両親がなにかやるとすれば、お前を傷つけることくらいのものだ。お前は両親に頼ることはできない。お前が今のようになったのは、彼らのせいだ。両親が人間的に向上することはありえない。お前が自分を向上させるしかないのだ」

《アドバイス》どうしようもないボスかどうかは、論文に対する姿勢でわかり

ます。あなたの書いた論文は、研究者としての生命線です。ボスに提出してもレスポンスが極端に遅いのであれば、とどまるべきか考えたほうがよいでしょう。また、極端なインパクトファクター狙いのボスも注意すべきです。いくらよい論文を出しても、数年に1報しかないのであれば、あなたの仕事として評価されないかもしれません。論文に対して、あなたのボスは研究者としての使命を賭けているのか？見極める必要があります。しょうもないボスについてしまったあなたに必要なものは、ボスからの承認ではなく自立心です。はやめに見切りをつけて、ほかのラボへ移りましょう。

3 研究者として自分らしく生きる

少々極端な例を紹介したが、われわれは、研究そのもので悩むことはきわめて少ないということを知っている。悩みや厄介事の多くは、研究を遂行するうえでの人間関係からきている。そこには少なからず、ボスやまわりの研究者から認められたいとか、よい研究者として好かれたいという気持ちが介在しているはずだ。

なぜ、他人に好かれていないと不安になってしまうのであろうか？それは他人からの評価を通して、自分の価値を見出そうとしているからである。他人が自分をどう思っているのかは絶対にわからないし、そこに確証を求めれば求めるほど、不安は増大する。

また、研究生活が長くなればなるほど、自分はこうあるべきだという感情が自ずと強くなる。それが強くなっていくと、自分としての生き方が窮屈になってくる。何のために研究をしているのか、そもそも自分はなぜ研究者になったのか、堂々巡りになる。なので、研究者として軌道に乗ったときに、自分の内なる気持ちに耳を傾け、今の自分は自分としてあるべき姿なのか、自己点検を行う必要がある。

素で生きている自分を断片的にでも感じられれば、他人の視線は気にな

らなくなる。また、ビジョンが明確になるほど不安も薄らいでいく。筆者も旅の途中にあり、迷いながらも歩き続けている。めざすべき目標に到達できないかもしれないが、それでも自分らしく生きることで、この一瞬一瞬の連続のなかでリアリティーを感じることができるからである。

本書はPI (Principal Investigator) になるためのヒントを提示したにすぎないが、大切なのは、どうやったらPIになれるかではなく、PIになる肚のくくり方であると思う。もちろん一番重要なのは、研究者としてあなたがあなたらしく今を生きることである。明るい姿勢で前進し続けることで、あなたを手助けしてくれる誰かが、きっと現れるはずだ。

最後に、ここまでお付き合いいただいた読者の皆さんに感謝いたします。そして、皆さんにとって実り多い研究生活であることを祈念いたします。

Carpe Diem !

2014年10月

阿部章夫

